

教職支援センター ニュースレター

巻頭言 【児童生徒にとって安全・安心な学校とは】

学校(学級)は、全員の子どもにとって安全かつ安心できる場所でなければならない。「安全」と「安心」は似ているようでいて実は異なる。安全(性)は科学的・客観的に評価することができるが、安心かどうかは、その人の心の持ちようによって変わるからである。

生徒指導提要では、特別活動の学級・ホームルーム活動の箇所、「児童生徒は、学級・ホームルーム活動における自発的、自治的な活動や学校行事などに取り組むことを通して、集団への所属感や生活上の規範意識を高めるとともに、学級・ホームルームを安心して学習活動に励むことのできる環境として作り上げていきます。」¹⁾と記述されている。

いくら学校(教師)が学校(自分の学級)は安全であると言っても、必ずしも「安心」に結びつかないのが人間(児童生徒)の心というものである。文部科学省(2022年10月27日公表)によると、2021年度の全国のいじめの認知件数は約61.5万件(前年度+約9.8万件・19%増)であった。

子どもたちは集団で様々な活動を通して、お互いに信頼できる人間関係を構築し、最終的に安心して学習活動を行える環境を形成していくのである。教師と子どもとの信頼、子ども同士の信頼があってこそその学校・学級である。日本全国すべての学級・ホームルームが真に安全かつ安心できる場所であるかどうか、今一度真剣に考える必要がある。

現行の学習指導要領における学級経営の目的は「主体的・対話的で深い学び」との関連が強く打ち出されている。授業改善をして「主体的・対話的で深い学び」という高度な学びを実現するためには、子どもたちの主体的で自治的な取り組みが不可欠であり、その前提として安全かつ安心できる学級であることが重要である。

さらに、学級経営は「特別活動の資質・能力の実現によって深化していく」と記述されている。特別活動の資質・能力とは、協働の知識・技能を学び、話し合い・合意形成・意思決定の能力を身につけ、そのような営みを通して人間関係を形成し自己実現していくような子どもを育てることを意味している。「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、子どもたちが安全かつ安心して他者と協働し、自ら問題解決していくような学級集団づくりが令和の時代には求められている。

1) 生徒指導提要、令和4年12月、文部科学省、P.61

*本稿は、「月刊生徒指導2023年10月号日本生徒指導学会
学会掲示板 P.86」に掲載されたものを基に筆者がニュースレター用に改稿したものである。



田村 徳至 (教職支援センター 准教授)

私が教育実習で

最も楽しみにしていたこと

小川 舞也

理学部 数学科
数理科学コース 4年

理学部 数学科

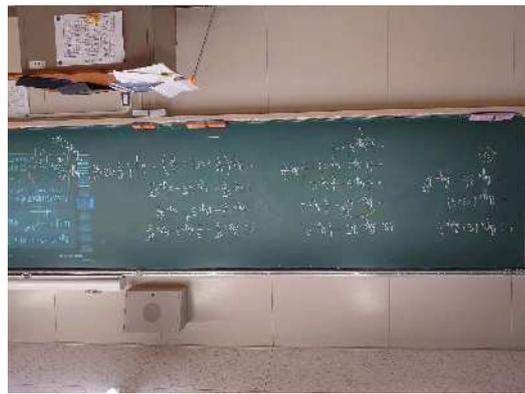


私が教育実習で最も楽しみにしていたことは「授業実践」でした。ここでは授業実践で学んだことを述べていきます。

1つ目は「生徒の発言から学ぶことがある」ということです。授業実践を始めた当初は、教材の内容を理解し、生徒の動きを予測して教材研究に取り組み、その成果を授業にすれば良いと考えていました。ところが、限られた授業時間の中では計画通りにこなせず、私の予想していたような箇所を踏んで生徒もおり、慌てることばかりでした。私が数学的帰納法の授業をした際、ある生徒が「説明されればわかる。自力で気づくのは難しい。」と呟いたことが印象的でした。この呟きによって、数学的帰納法における「生徒が要求する」ポイントが私の中で明確になりました。次の授業では、式変形のポイントや、式変形を強調したり、発想を言語化したり等、生徒の実態に応じた授業を作ることができました。このように、生徒の発言は、指導の指針となり、教師の指導観を改めるきっかけになることが分りました。

2つ目は「成功体験の大切さ」です。指数関数の応用問題を扱った際、典型的な誤答に導くように設問を工夫しました。すると殆どの生徒が誤答をしたため、私は誤りの原因と対策を全員に考えさせました。前時に教えたポイントや、また私が最小限のヒントを出したりすることで、生徒全員が原因と対策を理解し、正答に辿り着くことができてきました。私としてもこの授業が、生徒が最も意欲的に取り組んでくれた授業だったと感じており、生徒もこの授業が最も印象的で学びがあったと語ってくれました。このような成功体験が、生徒や教師を成長させてくれるのだと感じました。

このような体験を通して、私は「学校で学ぶことの意義」を改めて学びました。ネットでの自学自習が可能になり、質の高い映像授業が溢れている現代において、習熟度や思考のプロセスが異なる30数人の生徒が1つの教室に集まり、一緒に同じものを勉強することは、一見さす非効率に思われます。しかし、学校では仲間と共に切磋琢磨していき、教え合いながら共に成長することができてきます。従って、教師が授業で目指すものは、何よりもまず生徒主体な授業であり、成功体験・感動体験と教科内容を紐付けた指導だと分かりました。一方で現場の先生方も常に試行錯誤であるという実態も知り、授業作りの難しさややりがいを感じました。この教育実習における経験は私にとって一生の宝となりました。貴重な機会を与えてくださった実習先の先生方や生徒の皆さん、有難うございました。



教職支援センター9～11月の動き

- 教職実践演習授業参観(松本地区(9/5,9/26)、工学部(9/5～10/23)、農学部(10/11)、繊維学部(9/6))
- 教職教育部会(9/11)
- 教職支援センター第2回拡大打合せ(9/15)
- 理学部と総合教育センターの連絡会(9/26)
- 長野県教育委員会の連携協議会(10/13)
- 長野県総合教育センターの連絡協議会(10/17)
- 長野県教員育成協議会(11/13)



教育実習を終えて

人文学部 人文学科

歴史学分野東洋史コース 4年

村上 慶悟

インクルーシブ教育への取り組みで
大きなやりがいを感じました

今年の5月末から3週間にわたり、母校である合志市立西合志南中学校で教育実習させて頂きました。実習前は3週間という期間をとても長く感じていましたが、実習を終えて今振り返ると、あっという間の3週間、沢山の学びを得られた貴重な時間になりました。今回は教育実習での学び、今後の抱負を書かせていただきます。

学級指導を担当したクラスは3年生でしたが、担当教諭の受け持つクラスの関係で、私は1年生と3年生で授業を担当しました。そのため、特に1年生のクラスは授業以外の接点が多かった。最初は生徒との距離感を感じることも多かった。しかし、授業前後に積極的に生徒と話すようにした

ことで、授業中の生徒からのリアクションも増え、私自身も楽しく授業を行うことが出来ました。生徒を知る

この大切さ、生徒とともに授業を作り上げるこの大切さを学ぶことが出来ました。今回の実習で私にとって大きな課題となったのは、「特別な配慮を必要とする生徒への授業方法」です。私の担当クラスの1人に、障がいを抱える生徒が在籍していました。大学で学校現場でのインクルーシブ教育の実施、障がいを抱える生徒にどのような配慮が必要であるか等について学んできましたが、実際は障がいの程度が生徒によって大きく違い、人ひとりに合った指導を行う大変さを実感しました。そこで、特別支援の先生に授業プリントや発問について助言を頂き、その生徒が学びやすくなるような授業内容を個別支援の先生に授業プリントや発問について助言を頂き、その生徒が学びやすくなるような授業内容を目標しました。上手いかわからないことも沢山ありましたが、最後の授業を終えた後に、その生徒が「先生の授業は凄くわかりやすく楽しくかったです。3週間ありがとうございました。」と言ってくれました。その言葉をかけられた時に「大変なことも沢山あるけど、教師としての喜びややりがいはこのような時に感じるのだろな」と思いました。この生徒と出会えたことで、教員を目指す気持ちが高まりました。

3週間を通して、教員の楽しさややりがいを感じると同時に、責任と覚悟を持って取り組み組むべき仕事であると感じました。来年の春から実際に教員として働くことになりましたが、それらを絶対に忘れないようにします。最後に、3週間に渡って学びの場を提供してくださった実習先の先生方と生徒たち、採用試験をはじめ様々な場面で支援してくださった教職支援センターの先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。



地域連携パートナーからのメッセージ

信大生の支援に感謝!

松本第一高等学校 SS特別選抜コース主任
三並祐子

松本第一高等学校SS特別選抜コースは、国公立大学や難関私立大学を目指して、それぞれの目標実現のため日々学習に励む生徒たちの集まるコースです。昨年度からコース企画として、週2回放課後の時間に信州大学の学生さんから学習支援を受けています。部活動などに励む生徒も多くいるため、希望者を募って学習支援を実施しています。



年齢も近く身近な存在である大学生の方々から分からない所を教えてもらうことで、大学生活への憧れを持つとともに、個々の学習を主体的に進める意欲を促進する目的で始めた企画です。今年度2年目に入り、当初の目的が達成されていると感じられる場面が増えています。

参加している生徒たちから、以下のような声が集まっています。

「数学を教えてもらっている時、普段は分からない問題の解答を見て理解しているが、(信大生の)先生がいると、解いている最中にヒントをもらえるので数学的な考え方が身についてきた気がする。」

「数学で分からない問題を教えてもらい、自力でも解けるようになった。数学のテスト点は大幅に上がり、問題にも恐れずにチャレンジできるようになった。分からなくても、かみ砕いて分かりやすく教えてくれて、安心感が大きかった。」

「物理のモーメントについて、教えてもらう前は全然分からなかったが、正しく分かりやすく教えていただいたので、その時の物理のテストで1位を取ることができた。」

「信大生の方たちが分かりやすく教えてくれて、おかげで学習支援のある日の学習の効率がとても高まるようになった。」

参加生徒の多くは、数学や理科の問題を質問しています。授業で理解したつもりでいても、いざ問題を解くととなかなかスムーズに進まないことがあります。しかし、生徒たちはこの学習支援を通して、問題が“分かった!”という瞬間を味わい、学ぶことの楽しさ・面白さを実感しています。さらに、大学生のみなさんと“分かった!”の気持ちを共有できることが、生徒たちの学習への気持ちをより高めてくれています。



このような貴重な機会を提供して下さっている信大生のみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも生徒たちの身近な頼れる存在として、変わらぬサポートをよろしくお願い致します。



編集後記

今号では、学生たちの教育現場での活躍を掲載することができました。大学でも学生達は多くの知識を学びますが、教育実習や学習支援などの現場での経験からも、学生たちはより一層深く、充実した学びを得ている様子が伝わってきます。貴重な経験の機会を与えてくださる現場の先生方に、心より感謝申し上げます。
(広報担当 横嶋敬行)